

JAきたみらいが挑む「ゆめいころ」への全面転換 ～みらいを守る挑戦PCNと向き合い、産地を守るために～

JAきたみらい 販売企画部
馬鈴しょグループ マネージャー

まつもと たかし
松本 隆史

はじめに

北海道の広い畑では、毎年たくさんの馬鈴しょが育っています。その裏側で、産地を守るためにどんな工夫や悩みがあるのか。JAきたみらいが進めるPCN（ジャガイモシストセンチュウ類）抵抗性品種への全面転換について、これまでの経過と現状について、その一端を報告します。

1. 小さな“発生”が生産者にとっては大きな不安

～PCN発生から18年、続く不安と現場の葛藤～

JAきたみらいは、2003年に北見市、置戸町、訓子府町などの8JAが合併して誕生しました。2024年現在で正組合員数が855戸、耕地面積は24500ha、販売額は538億円で、日本一の生産量を誇るタマネギと馬鈴しょで半分以上を占めています。

【馬鈴しょ生産への取り組み状況】

- ・ 昨年は2023ha、生食用では男爵薯、とうや、スノーマーチ、ゆめいころ等で約1200ha。
- ・ 加工用ではチップ用等で500ha、種バレイショでは原種、採取併せて305ha。
- ・ 栽培品種のうち、PCNに抵抗性のな

いのは男爵薯のみであるが、生食用と種馬鈴しょ合計で790haと4割を占めている。

- ・ これを令和10年には、全て「ゆめいころ」に切り替える計画を立てている。

当JAでは2007年、初めてPCNが確認されました。以来、独自の蔓延防止対策を続けてきましたが、数年に一度は発生圃場が確認される状況が続いています。発生割合は耕作面積の0.3%と決して多くはありませんが生産者にとっては大きな問題です。発生圃場を抱える生産者にとっては、機械洗浄や集荷順の調整など精神的・作業的負担が大きく、隣接圃場の生産者も「うちの畑は大丈夫だろうか」と不安を抱えながら営農を続けています。

さらに深刻なのは、種馬鈴しょ生産への影響です。当JAには50戸の種馬鈴しょ生産者が約300haを作付けしていますが、防疫検査で過去2回不合格となった事例があります。不合格となれば翌年以降の作付けを断念せざるを得ず、その減少分は一般馬鈴しょ用の種いも供給に大きく影響を与えます。

この状況が続けば、いずれ他産地に依存せざるを得ない・・・

そんな危機感が現場にはありました。

2. 「男爵薯」のままでは守れない未来

近年、気象変動（温暖化や干ばつなど）が進む中で「男爵薯」は品質・収量の安定性に課題があり、PCN抵抗性もありません。PCNは、近年では種馬鈴しょの圃場でも発生が確認されていて、種馬鈴しょ作付面積減少の要因の一つとなっています。発生圃場に隣接する他の生産者は、不安を抱えながら営農しています。

「このままでは現状維持が精いっぱい。いずれ生産が縮小してしまうのではないか」そんな不安が生産者の間に広がっていました。

地域の種馬鈴しょ、そして一般馬鈴しょの生産をどう守るか。生産者の不安をどう払拭するか。JAとして何ができるのかを考えた結果、たどり着いた答えが、“すべての品種を抵抗性品種へ切り替える”という決断でした。

【PCN蔓延防止対策】

- ・次年度の馬鈴しょ作付予定圃場全筆の土壤検診や植え付け後の植物検診、機械の圃場出入り時の洗浄など、拡散防止・早期発見・全体把握に努めている。
- ・発生した場合には圃場に専用土場を設置、出入り時の機械洗浄を徹底、集荷の順番調整、共同利用機械の制限、品種は抵抗性品種のみなど、様々な制限を課している。

3. 「ゆめいころ」との出会いと確かな手応え

馬鈴しょのうち、でん粉原料用ではPCN抵抗性品種への切り替えが完了していますが、生食用では抵抗性のない「男爵薯」や「メークイン」がメジャーで、切り替えが進んでいないのが実情です。品種選択に際しては、第一に収量性が「男爵薯」と同等以上であること、二番目には販売面でも「男爵薯」と同等以上のブランド力で売れるかということが課題となります。「男爵薯」の産地の方が優位になってしまうのではないか、「男爵」をうたった加工品が多いことから加工ユーザーは大丈夫か、といった不安もある訳です。

そして、当JA管内では輪作体系の中で、馬鈴しょの後に小麦を播く作型が多いので、早生・多収で、そうか病に強く、休眠が長いことが求められます。これらの条件を満たす品種として「ゆめいころ」に着目し、3年間の試験を行いました。

試験の結果、「男爵薯」よりも多収で病害にも強いことが分かりました。高温・干ばつという厳しい気象条件だった令和7年産でも、「ゆめいころ」は3900kg/10a、「男爵薯」は3060kg/10aと平年作以上の収穫がありました。また、2LからL、LMという、生食用の市場では一番高く売れる規格の比率が「男爵薯」よりも非常に高いので、生産者の手取りが増えます。このように生産面での不安はほぼ払拭され、生産者からは「作りやすい」、「早く切り替えを」という声が増えてきました。

しかし、最大の懸念は「販売」です。長年、「男爵薯」に誇りを持って生産してきた生産者にとって、ブランドを手放す決断

は容易ではありません。このため、市場・量販店バイヤーに対し、産地の現状、全面転換の覚悟、ゆめいころの特性を丁寧に説明し続けてきました。その結果、令和7年産（40ha）については市場評価も高く、一部の加工メーカーでは「ゆめいころ」を冠した総菜開発も進むなど、確かな手応えが生まれています。

4. 品種切り替えの課題と対応

どれだけ良い品種でも、そう簡単には切り替えは進みません。課題は3つあって、まずは生産者の理解、次に種馬鈴しょの確保、そして3つめは販売先の理解を得ることです。

当JAにおいては、生産者の理解という点では、きたみらい馬鈴しょ振興会という生産組織の会議で協議を進め、販売先へのPRの進捗状況を報告しながら試験栽培の規模を拡大して生産者の理解と作付意欲の醸成を図ってきました。

種馬鈴しょの確保では、すべて抵抗性品種になることでリスクが低くなることを生産者に説明し、所得を確保できる種馬鈴しょの価格とする等を提案してきました。

3つめの販売先の理解の確保と言う点では、全国の生食用馬鈴しょ販売先（青果卸売市場80社、加工ユーザー30社：販売額約50億円）に対して、「ゆめいころ」の知名

度アップに取り組むこと、品質（規格）が良くても暑くても穫れるので安定して供給できる、ということを説明してきました。近年の異常気象もあり、今や安定供給できるということが大きなブランド力となっています。

おわりに

JAきたみらいでは、約2,000haのうち800haを占める「男爵薯」を、すべて「ゆめいころ」へ切り替える方針を決めました。これは生産者にとってもJAにとっても大きな挑戦です。JAでは生産者との協議を重ね、「安定生産できれば、安定供給につながり、安定した販売が実現する。産地を守る力になり、『ブランド力』になる。」という共通認識を築いてきました。市場・量販店バイヤーに対しても、産地の想いを丁寧に説明し続けてきました。

今回の取り組みを通して感じたのは、生産者、販売先、関係機関など、みんなで一緒に進むことの大切さです。信頼関係や絆が産地を支える大事な力になっています。全面切り替えまで、あと2年。きたみらいの馬鈴しょづくりを未来につなぐため、生産者とともに挑み続けます。「ゆめいころ」が、その語源どおり、“たから”となるように！